

## 義務教育課だより 4月号

【東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に寄せて】

いよいよ始まった令和3年度——。

我が国にとって、今年度最大級のイベントの一つとなるのが、開幕まで四か月を切った、東京オリンピック・パラリンピック競技大会であると思います。3月25日に福島県からスタートした聖火リレーは、4月21日・22日の2日間、愛媛県内の全20市町を巡る予定となっています。

さて、1964年に開催された前回の東京オリンピックにおいて、日本選手団は、金メダル16個を含む計29個のメダルを獲得しました。「日本の競技力が世界に通用する」手応えを国民が実感した大会でした。

オリンピックが終わってからは、サッカー、バレーボールをはじめとする多くの種目で実業団による日本リーグが活性化し、オリンピックを経験した選手やコーチが開くスポーツクラブ等は瞬く間に全国に広がりました。これらの動きにより競技の裾野が広がり、日本のスポーツ界はめざましい発展を見せました。

今では、2012年のロンドン大会で金メダル7個を含む計38個、2016年のリオデジャネイロ大会で金メダル12個を含む計41個のメダルを獲得するなど、日本の国際競技力は確実に上がっています。

とはいえ、この半世紀の間、日本のメダル獲得数が右肩上がりでは伸びたわけではありません。1988年のソウル大会から2000年のシドニー大会までのメダル総数を見ると、東京大会の29個に遠く及ばない時期があったことが分かります。

○1988（ソウル） 14個      ○1992（バルセロナ） 22個

○1996（アトランタ） 14個      ○2000（シドニー） 18個

オリンピックにおける競技力向上の背景には、様々な要因があったと思われますが、その一つが若者の海外進出ではないかと思われます。1990年代後半からプロスポーツ選手の海外での活躍が連日報じられるようになりました。これを目の当たりにした、スポーツ好きの子供たちの心に、「いつかは自分も世界の舞台で活躍したい」という気持ちが芽生えたのは間違いないと思われます。10代の有望な選手をいわゆるジュニアの国際大会の舞台に送り出す競技団体も増えてきました。一時期、報道等では、国際大会で実力を発揮できない日本のアスリートを取り上

げ、「プレッシャーに弱い」などの形容がなされていましたが、今や「大舞台をものともしない」といった表現がよくなされるようになりました。

アスリートの活躍の場も増えてきました。1964年当時、20競技163種目だった競技・種目数は、今回の東京大会では、オリンピック33競技339種目、パラリンピック22競技539種目に増え、1988年のソウル大会からオリンピックと連動し、同時期、同会場で開催されるようになったパラリンピックには、今回、愛媛県からも、多くの選手が出場する予定となっています。

オリンピックという一大イベントが出発点となり、日本のスポーツ界は大きく変わりました。規模の違いこそあれ、学校においても、毎年、大小様々なイベント等が実施されます。

ある出来事を契機として子供たちが見違えるように成長し、自信と意欲、目的をもって人生を歩むこととなる。子供たちにそのような経験を積ませるチャンスがたくさんあるのが学校です。

令和3年度は、昨年度に引き続き、コロナ禍でのスタートとなりますが、皆で知恵を絞って、子供たちにとって意義深い経験を一つでも多く積ませることが出来る一年となるよう努めていきましょう。